

松浦理英子

RIEKO MATSU-URA

拓カルト
拓毒味定食

YORIKO SHONO

笙野頼子



松浦理英子

RIEKO MATSUEIRA

おカルト
お毒味定食

YORIKO SHONO

笙野頼子

おカルトお毒味定食

★

一九九四年八月二五日 初版印刷
一九九四年八月二五日 初版発行

著者★松浦理英子／筆野頼子

装幀★ミルキイ・イソベ

発行者★清水 勝

発行所★株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二二二二一

電話★三四〇四一二〇〔営業〕三四〇四八六一〔編集〕

振替口座★〇〇一〇〇一七一一〇八〇二

印刷★大日本印刷株式会社

製本★加藤製本株式会社

©1994 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN4-309-00928-X

前書き★松浦理英子——5

I なにもしてない馬鹿ナチユラル・ウーマン女の修業時代——9

II もの言うトーキング・ドラマ太鼓のように——77

III ペシミズムと快楽と——133

IV そして長電話は続く——195

あとがき★笙野頼子——240

本文中、★は松浦理英子氏、◆は笙野頼子氏の発言です。

Iは、92年12月に行なわれ、『ブックthe文藝』（93年3月）に、
IIは、笙野氏への松浦氏のインタビューとして、94年3月に行
なわれ、『文藝』94年夏季号に掲載されました。IIIは、松浦氏
への笙野氏のインタビューとして、IVとともに94年4月に行な
われ、本書が初めての発表です。

■
おカルトお毒味定食
■

前書き

RIEKO MATSUURA
松浦理英子

本書のタイトルは『交友の一例』がいいのではあるまいか、と提案してみたのだが、堅くて地味との理由で不採用になった。もっともな理由なので文句はない。

しかし私は、この笹野頼子さんとの対談集は交友の模様のドキュメンタリーとして読んでもらえたらいい、と考えている。小説家同士の対話だから文学の話題も出て来るのだけれども、文学観や作品論や自作解題ならば特に対談の場でなくてもどこでも同じことを話したり書いたりできる。そうした不動の要素よりも、対談の現場で実際に生まれ育つもの、発言の意味内容ではなくことばの動きや温度や緊張を通して表われるものの方が、読んでスリリングなのではないか、と当事者のひとりよがりかも知れないが想像するのである。

たとえば巻頭の対談。後の対談の折にも触れたことだが、笹野さんと初めて本格的

に話すに当たって腰の座らない軟弱者の私は、一応文芸誌に掲載される対談なのだからそれらしい話をしなければ、という強迫観念と、どちらかと言えば対談の進行係を受け持つのは私の方であろう、という何とはなしに抱いた思い込みで、ガチガチになって臨んだのだけれども、しばらく話しているうちに、つまらない自意識に捉われず自分自身で掴み取った力強いことばだけを真摯に、また奔放に投げかけて来て、しかもガチガチの私を絶えず温かく気遣ってくれる笙野さんの態度にすっかり感じ入り、これは笙野さんにすべて委ねてしまった方が対談も面白くなるし私も心地よい、とわかって、さっさと硬い構えを解いたのだった。対談Ⅰにおける最も美しい場面は、笙野頼子さんという存在に感動した松浦理英子がよけいな強迫観念や思い込みを放棄した瞬間にある、と思うのだがどうだろうか。

それから対談Ⅱ。これは厳密には私から笙野さんへのインタビューとして行なわれた。対談Ⅰがきっかけでこの頃笙野さんとは私的に電話をかけ合う間柄になっていたのだが、インタビューの内容によっては笙野さんが「松浦は私の書く物をちっとも理解していない」と呆れつき合ってくれなくなる可能性もあるため、試練の舞台であった。結果はと言えば読まれる通りで、笙野さんはさぞや胸中苛立ちや不満を覚えたであろうに寛大な心で至らぬ私を許してくれたようで、めでたく対談Ⅲ、Ⅳも実現する運びとなった。

そういうわけで、本書には交友のさまざまな局面が仄見えるはずだ。とは言え、そこを読んでほしいというのはあくまで著者の一人の希望に過ぎず、読者に従う義務が全くないのもちろんである。だいたい発言の意味内容を取っても、思いがけない角度から「文学」を照らし洗い直す笙野さんの言うことは常にりりしくカッコよく、松浦理英子の発言を飛ばして笙野さんの発言だけを読んでも本書は魅力的であるに違いない——などと自分で書くのは情けなく恥ずべきことかも知れないのだが、小説家として尊敬し憧れてもいるし、プライベートでは優しく面白くいつも私を陽溜りでふかふかの蒲団に寝そべっているような気分にしてくれる友人、笙野頼子さんとのこれらの対談はとても楽しかった、というだけで根が快樂主義者の私は満足している。

改めて笙野さんに感謝を捧げるが、結局この一文で私は終始友達を自慢したことになるだろうか。

I

なにもしてない馬鹿女の修業時代

ナチユラル・ウーミン

◆ ええと、ここに来る前にね、実はこういう対談をしますって、あっちこっちでまあいろんな人に言ったの。そしたら、面白いつていう人と、まったく正反対の組み合わせだとびっくりした人と二通りいて、それで、松浦さんと私はすごく違うように見えて、実はとても似ているところがあるかもしれないと思ったりしたの。

★ そういう気がしますね。

◆ いやあるいはもしかしたら似ているというよりは、ものすごく変な組み合わせかもしれない。つまり非常にかけ離れているんだけど、これ以上しっくりした取り合わせはないというようなパターンなの。たとえば、いちご大福か何かで、松浦さんがいちごで、そうすると私が大福になるのか(笑)、そういう感じになっているのかもしれないと思って。

松浦さんは、かなり性を主題になさっていると思うんですけども、私は性と思っでは読んでいないんです。前にも言ったんですけども、小説を読む時に、物語云々を読むのではなくて、その小説に描かれた時間とか場所を読んでいるらしいのです。で、その読み方で読むと、ものの考え方とか制度の骨格みたいなものが、普通に性を書い

ておられる他の方よりもずっとよくあらわれているんじゃないかなという感じがしました。

「普通に」なんて、ごめんなさいね。物語にポイントを置いて書いているんじゃないかと、何かのありようをあらわすために、性というものは、たぶんみんなよく知っていると、思い込んでいるものなんだろうけれども、それをちよつと位相をずらしてみたら、たとえばロボットの表面が透明になっていて中に銀色の骨みたいなのがあつて、その骨が動いていたら、それがそのままリアルにあるよりもっと生き物を感じさせるというか、そんな目的意識のある、テーマを潜めた書き方じゃないかなと思つたんです。私は性については殆ど何も書いていないのでこんなこと言う資格はないかもしれませんが、ただ、素材は違つても、私も骨を書こうというようなことを思つていて、それで、そういう思考実験的なものを感じたんです。

★………笹野さんは、思つたより早口で能弁ですね。

◆ **普**段ずつとひとりでもつてるでしょ、だから勢いがついた時なんかものすごく喋るんです（笑）。一ぺんお目にかかっているんですよ。

★ ええ、『文藝』の校正の時に、チラッとね。

◆ **で**も殆ど初対面に近いですよ。私、**“初対面愛想いい病”**というのがあつて、初対面の人というのは、たとえばそこにいても、これから家に帰るとかいうのじゃな

くて、電車に乗るところでフツと消えてしまったりという感じがしますから、全然こわくないんです。ファミコンゲームの人と喋っているみたいに、いくらでも喋れるの。

★ 私、こういう対談となると、遅いんですよ。

◆ すみません。あのう、私、こわいですか（笑）。

★ いや、笹野さんがこわいんじゃないかと、誰でも上がっちゃうんです。ちょっと待ってくださいね。ゆっくり喋りますから。

私が笹野さんのことを知ったのは、最初の作品集の『なにもしてない』というのが出て……。デビューは古いんですよ？

◆ 一年ばかり前です。

★ そうですよ。だから私のデビューとそんなに違わない。

◆ 私、辛酉の年に出たんですよ。八一年。たぶん松浦さんのほうが二年くらい早いですよね。

★ そう思います。

◆ 十二支で言うとなん年だった？（笑）

★ そういうの、全然覚えていないんですよ（笑）。

笹野さんがデビューなさった当時は『群像』を送っていたっていませんでした。

それで、失礼ながら、なかなか接する機会がなかったんですけれども、本になって、

実は友達が「今非常にのって読んでいる本がある」と言うので、「それは何？」と訊いたら「笹野頼子という人の『なにもしてない』という小説だ」と。それで私も読んでみたんです。

◆ **あ**りがとうございます。

★ **そ**れで、これはちよつとありがちな女流作家の作品とは違うと思ひまして、その当時はまだ自分と読み比べてみるというようなことをしていませんでした。それから雑誌などでも読むようになりました。やはり非常におもしろいですね。読みにくいけど、おもしろい。

◆ **読**みにくいですよ。寝る前なんか、いらしいですよ（笑）。

★ **そ**れでほかの友達にも「こういう人がいるから」と私が紹介しまして、するとその友達は『群像』掲載の『居場所もなかった』と『なにもしてない』を続けて読んで、すっかり笹野さんのファンになって、「女流は笹野頼子ですね」と言っています。

◆ **あ**のう、松浦さん、すごく緊張して、人の気配に脅えて、テンションあがっていません？ それとも私になかズレた事いいましたか。

★ **脅**えているんじゃないんです。話下手なだけなんです。

◆ **身**体に針が刺さっているような恐怖感を感じていませんか？

★ **そ**んなことないです（笑）。

◆ **実**は私は今けろつとしてても後で揺り返しがあるんですね。思い切り喋って愛想よくして、ギャハハとか笑ってて、帰ると丸まっちゃうんですよ(笑)。後で、自分が喋ったことが全部針になって、バーツと身体についてくるような感じがするの。ええと別に言葉狩りをするつもりはありませんが、今、女流って言葉が出ましたよね。ご自分で「女流」と言われると、どんな感じがなさいますか。

「女流」であること

★ **女**なんだから女流なんだろうなと思います。文章で書く時には、なぜか「女性作家」と書いているんですけども、とりあえずセックスの差異があつてジェンダーの差異もある——社会的にですよ——のは事実なんだから、さほど神経質にならなくてもいいんじゃないかと思つていますけれども。

たとえば、女だということではかの女流作家と比べられるとか、女流作家の系譜の中に位置づけられるということは当然あつて、私自身もやっていますが、批評される時に、あまり女であることだけを言われたくないのは確かですね。特に、批評する側が勝手にあるべき女性像を想定して、その女性像に当てはまらないものを否定する、というようなことは……。